

第3回家庭教育支援指導者等研修 実施レポート

日時：令和2年11月5日（木）10時～15時

会場：秋田県生涯学習センター 3階 講堂

参加者：81名（うち市町村等から55名）

今回は「特別支援教育の視点から考える家庭教育支援」「聞き上手になるためのアサーション・トレーニング」というテーマで研修をしました。講話・演習を通じて、支援の必要な方についての理解、校内支援体制及びネットワークの構築等についての理解を深めました。

【午前の部 講話・演習】

県立支援学校天王みどり学園教諭（兼）教育専門監の**新目 敏子氏**に、支援の必要な子どもの理解と支援の工夫について講話していただきました。障害の捉え方は周囲の理解と支援（環境）によって変わり、「～があれば～できる」とプラスの面からアプローチする重要性を強調されていました。その具体例として、学習面で困難を示す子どもたちについての話に移り、参加者は実際に困り感を体験してみました。スクリーンに映った一文を利き手ではない方で書くと言形も乱れ時間もかかります。しかし、書く欄の隣に見本となる文字があれば、あまり書きにくさを感じずに書くことができます。このように、近くにモデルがあること、キーワードのように簡略化して示すこと等も合理的配慮といえるのだそうです。また、自己肯定感を高める次の対応を事例を含めて教えていただきました。



・スキップする ・注目する ・共感する ・認める ・できることから、成功体験を積み重ねさせる
結びには、園・校内の支援体制や相談機関、働くことを支援する機関等、支援の必要な子どもを支える仕組みの紹介がありました。参加者に対し、幼児期（低学年）から次の4つの力「①大人との信頼関係 ②身辺自立 ③基本的な生活習慣 ④自己決定」を少しずつ身につけることが課題とされ、それがどのような習慣で行われているかをキャッチして、地域で支援してもらいたいとメッセージを送ってくれました。

【午後の部 講話・演習】



NPO法人KOU理事長の**大屋 みはる氏**に、アサーショントレーニングを交えながら、実体験を基に、アサーティブなかわり方や、ひきこもりについての理解及び居場所づくりなどについて講話していただきました。アイスブレイクとして、表紙に星と月、木を描き入れる活動をしました。参加者は大きさ、数、位置や形等様々なものを描きました。以前この課題に対して、太陽を描く方や没頭し続ける方もいたようです。ここでは、一人ひとりには価値観があり、個性や個別の感性、表現能力の差があることを感じ取ってもらいたいと伝えてくれました。「私もOK、あなたもOK」という態度で、互いに気持ちを伝え合い理解できるアサーティブなかわり方が大切であること、この関係をつくるには、相互に我慢も必要であることを話されました。次のケーススタディでは、声かけにYesNoはないけれども、対等な立場で、相手に勇気を抱かせるような働きかけを心がけてほしいと心が和む口調で話されました。大屋氏は長年、若者の自立支援や就労に向けたカウンセリング、親の居場所づくり等に県内各地で励まれています。その豊富な経験から、ひきこもることは悪いことではないことを挙げ、焦らずに、家族で対話ができるよう家族関係を見ながら・支えながら促し、社会参加のはじめの一步の場所を提供することが大切であると話した言葉には重みがありました。聞き上手になるためには、様々な思い込みを外していくこと、肯定的に評価すること、まだ途中と考えること等をおさえながら、自分の気持ちを伝えることが重要であるとまとめました。

【参加者の声】（抜粋）

- ・ 幼い段階から支援が必要な子に支援を届けることの大切さは、その子の自立、将来にかかわることだと思うと、いろいろな人が障害を理解して声をかけ、共感してあげられる社会になっていけたらと強く思った。学習機会を提供し、地域の中でいろいろな人の話を聞けたらよいと思う。
- ・ アサーティブなかわり方について勉強になった。ひきこもりに関してなかなか「その人」目線でつきあうことは難しい場面だが、背景なども考えていくことが大切だと感じた。聞き上手になるために、自分の気持ちを伝える（対等な目線で）ことを意識していきたい。